

## 文化フェスタ in 本国寺を終えて

本国寺住職 土屋賢泰

5年の歳月をかけた本堂の大修理が終わり落慶の法要を営んだのは、平成15年10月19日のことでした。町をあげてのご支援で復興できたお堂へ多くの人に足を運んで自分の目で見て頂きたい。出来れば、落慶にふさわしい催し物を用意できないか？こうした思案の背中を押したのが、知人の童話作家藤かおるさんでした。藤さんと交流のある「民芸」の岡橋和彦さんの「平家物語一人芝居」を是非一度やらせてもらえないかという話でした。

「平家物語一人芝居」は、岡橋さんが「平家物語 覚一本」を元に中世のことばの語りと一人芝居を演じ、岩佐鶴丈さんが薩摩琵琶を奏で、平家物語の要所をピックアップして再現するものです。藤さんと俳優座劇場のスタート公演に出かけその演技の迫力に圧倒されました。

町文化協会の石井清一さんを委員長に平家物語実行委員会を組織して、町教育委員会、文化協会、郷土史研究会に後援してもらい、10月25日に開催し、200席を埋め尽くす賑わいとなりました。

文化フェスタ in 本国寺は、本堂の落慶を機縁としてスタートしたのでした。「平家物語一人芝居」が好評であったことが自信となり、文化財活用の試みのひとつとして、文化がないといわれる当町の町起こしになればという2つの願いが一緒になって第2回へと歩む力になりました。

第2回は、町政50周年と文化フェスタ in 本国寺を掲げて主催が平家物語実行委員会、後援が県教育委員会、町教育委員会となりました。チケットの販売も、当山だけでなく町生涯学習課が窓口となり協力体制ができてきました。

第3回より主催を文化フェスタ実行委員会としました。演目は第4回共に、「新内と車人形を楽しむ」。お堂の内陣を舞台に間近に江戸の芸を堪能した一日となりました。人間国宝で新内の鶴賀若狭掾さんとお弟子さん方、八王子車人形の西川兄弟の共演となりました。若狭掾さんのお弟子さんが男女の新内流しとなってお堂を巡り、江戸の風情を再現して楽しませてくれました。西川兄弟の操る狐が生きて動いてるようで芸の修練を強く感じさせられました。第4回より町教育委員会との共催となりました。若狭掾さんの来演は、小川原清江委員が培ったご縁によるものでした。

第5回と第6回は、ミネハハ松木美音さんのリサイタルでした。書家の山内悠照さんのご縁によるものでした。声量豊かな歌声がお堂いっぱいの人々によびかけました。「歌は明るくミネハハ自身も明るく優しく、彼女をひきたてる衣装も羽衣のようで途中の早変わり女性のため息、花束をうけたミネハハは、本当に美しいと思いました。」（文化協会会報より）第5回ときは「里の秋」、第6回は「ふるさと」を全員で合唱しお堂のガラス戸を震わせた秋でした。

第7回と第8回は天満敦子さんのバイオリンリサイタル。NHKのBS2の「わが心の旅」で、天満さんを知りその来演は宿願でした。放送から5年の月日が過ぎた頃、天満さんと

呢懇の方に会うことができました。市川市の弘法寺貫主の石野日英上人です。日英上人の紹介により実現にこぎ着けました。「ご住職から天満さんの出演を伺った時には、『ええ！本当』が本音でした。」（文化協会会報より）開場前に行列ができてお堂は2回とも250席を超える人でいっぱい大きな感動につつまれました。

第9回と第10回は、売れっ子の2人の落語家が高座を勤めました。第9回が林家たい平さんの一門、第10回が柳家権太楼さんでした。2回とも落語の楽しさを十分に味わい尽くしたものとなりました。小川原元春委員が来演の労を取って下さいました。

新倉雅楽子委員の御尊父辻寿男さんのご縁で、宮内庁雅楽部の東儀博昭さんをはじめ「世界に雅楽を広める会」の来演を得て、第11回と第12回は、「雅楽の集い」となりました。演目の名称のみしか知らなかった「万歳楽」「蘭陵王」「納曾利」「越天楽」、朗詠や神楽歌を解説と実演をまじえて眼前で鑑賞できたことは素晴らしいことでした。笙やひちりき、笛や太鼓の音色がお堂に満ち、一糸みだれぬ群舞は平安の昔に我々を誘うもので圧巻でした。

第13回と第14回は、八代目一龍齋貞山さんと貞鏡さんの親子会になりました。一龍齋貞山は、講談界の名門とされ初代は江戸時代後半に活動し、現在で八代を数えます。初代が、隻眼であったことから伊達政宗の法号貞山院にちなんで貞山と称した事に始まったといわれます。八代目は、昭和52年に真打ち昇進をして襲名。貞鏡さんは、若手の女性講談師として活躍中。貞山さんは日蓮聖人伝を重厚な語り口で、貞鏡さんは「徂徠豆腐」「堀部安兵衛高田馬場」を若手らしい歯切れのよさで語りました。土屋賢史委員のご縁で実現を見ました。

テレビ等で広く活躍中の大谷康子さんのバイオリンリサイタルが実現を見たのが、第15回と第16回でした。吉田義郷委員のご尽力によりました。大谷さんは、お堂の環境や聴衆をこよなくよしとされ気持ちよく演奏できたことを喜んで下さいました。楽曲の選択、会場での演出、トークなど配慮がゆきとどいて天満さんとはちがった「大谷ワールド」を作り上げて楽しい演奏会でした。

気がつけば17年がたち、実行委員の高齢化などで、第17回を文化フェスタの最終回とすることが決まりました。最後は、大好きな天満敦子さんに3度目の来演をお願いしました。第7回の来演から10年の歳月が流れていましたが、天満さんからは年を重ねましたが頑張りますとのご返信をもらいました。望郷のバラードに耳を傾けながら、天満さんとマネージャーの坪田さんのご縁を深謝し、故人となられた石野日英上人の増円妙道を祈念いたしました。

文化フェスタに来て下さった皆さん、出演して下さいました方々、市生涯学習課をはじめ関係して下さいました方々、実行委員会の方々ありがとうございました。お陰様で無事終えることができました。

(2020.2.15)



2010年10月25日 天満さんを囲んで



2019年11月6日 天満さんを囲んで

文化フェスタの17年 2003～2019  
編集 足立純男 古川幸子 土屋賢泰 土屋賢史  
2020（令和2）年3月15日発行  
印刷 京文社印刷